美作大学・美作大学短期大学部紀要
2015, Vol. 60. 125～129

報　告

城東「じ・ば・子のおうちプロジェクト」活動報告

The activity report of [JOTOH Ji-ba-ko-no-ouchi Project]

堀　川　涼　子

キーワード：過疎高齢化・空き家・多世代交流・住民主体・ローカルガバナンス

1．はじめに　城東地区の概要

津山市は岡山県北東部に位置し、岡山県北部地域の行政、経済、教育、医療等の中心都市である。2014年1月1日現在の人口は 105,531 人、世帯数 44,519 世帯、65 歳以上人口 28,511 人（うち 75 歳以上人口 15,354 人）高齢化率 27.0％である。本報告の対象地、津山市城東地区は、旧津山市の中心市街地に位置し、13 町内からなる、人口 1,357 人、世帯数 667 世帯、高齢化率 44.1％（後期高齢者の割合は 26.0％）の地域である。

少子高齢化が進む我が国においては、中山間地域の高齢化の進行のみならず、地方都市における中心市街地の過疎高齢化も深刻な課題となっている。城東地区は寺院や旧跡が豊富で、観光地として町並みの整備や祭り、イベント等が開催され、町内会や近隣住民との結びつきは強い地域であるといえる。一方で、空き家は地域課題[1]となっており、商店の閉鎖等、過疎高齢化が進んでいる地域である。

このような中で、2011 年に城東まちづくり協議会[2]では、津山市が実施している「地域チャレンジ！公募提案型協働事業」[3]の採択を受け、「城東まちづくりプロジェクトチーム」を設置した。このチームは城東地区の各種団体代表者・役員（町内会、老人会、青壮年会、婦人会、子ども会、民生委員・児童委員、愛育委員・栄養委員等）と共に、行政、津山市社会福祉協議会、つやまＮＰＯ支援センター、そして美作大学により構成され、『城東地区の現状や課題、総合力（地域の魅力）を検証し、城東地区ならではの文化や歴史などの誇りと地域特性、生活の安心とが調和した心豊かで活気あふれるまちの将来像の策定とそれを実現するための仕組みを創造すること』[4]を目的として設置された。本プロジェクトでは、まず現状把握のために「城東まちづくりに関するアンケート」を作成し、15 歳以上の住民を対象にアンケート調査を行った。

このアンケートの作成段階から当時の福祉のまちづくり学科社会福祉専攻の 2 年生（2009 年度入学生）の自主ゼミ生[5]が関わり、以降「城東まちづくり協議会」の組織図において「美作大学」が位置づけられることとなった。（図 1）

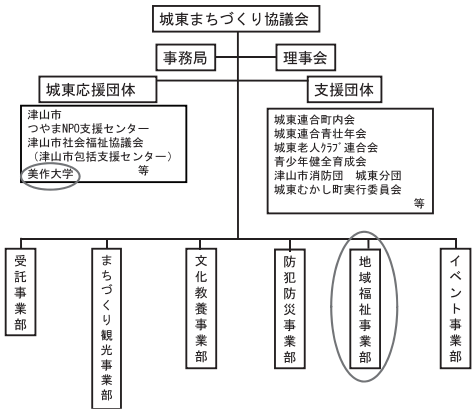

図１　城東まちづくり協議会組織図

出典；城東まちづくり協議会編『城東地区のまちづくり～人の話　まちの輪　城東の和』2012.3　p 56

この調査で明らかになった城東地区の課題をもとに現在は、以下の5つのテーマに沿って活動を行っている[1]。

① 空き地・空き家の整備
② 子どもと高齢者等を支援する活動
③ 城東の歴史・文化を後世に伝える活動
④ まちづくりを担う人材の確保と育成
⑤ イベントやまつりで活性化

特に社会福祉学科の学生は課題①および②について社会福祉の視点から「まちづくり」に関わり「じ・ば・子のおうち」プロジェクトに参画している。「じ・ば・子」とは「じいちゃん・ばあちゃん・子ども達」という意味であり、高齢者も子どももみんなが集える地域の居場所として「おうち」と名付けた。

2.「じ・ば・子のおうち」設立の経緯

2010年から城東まちづくり協議会では、少子高齢化の課題に着目し、普段は姿の見えない高齢者と子どもを主役にした交流の場として「城東じ・ば・子の文化祭」を年に一度開催してきた。子どもたちに「じいちゃん」「ばあちゃん」が長年生きてきた中で培ってきた「知恵」・「技術」などを伝えていく場として「文化祭」と命名した。当日は昔懐かしい遊びなど、子どもと高齢者等の多世代のふれあいの場を提供した。運営は城東まちづくり協議会が主催し、つやまＮＰＯ支援センターが事務局を務め、津山市協働推進室、津山市地域包括支援センター、津山市社会福祉協議会、美作大学等が協働して開催した。2010年当初は美作大学のボランティアセンターが行事への参画をしており、自主ゼミ生は、当日ボランティアという形で参加していた。しかし、2012年からは津山市内3か所で「じ・ば・子の文化祭」が行われることもあり、城東地区においては、今後継続的にかかわることを理由として、堀川研究室の自主ゼミ生が実行委員として企画から運営に至るまで参画することとなった。

3回目の文化祭後、実行委員の中から3カ年にわたって行われた「城東じ・ば・子の文化祭」を、年に一度のイベントで終わらせるのではなく、常設の交流の拠点を作っていきたいという機運が生まれ、城東まちづくり協議会地域福祉事業部の中でさらなる話し合いが行われた。その話し合いでの意見をもとに、2013年3月30日の城東まちづくり協議会総会において、自主ゼミ生が「城東の皆さんへ　～学生からの提案～」という形で「じ・ば・子のおうち」設立に向けてプレゼンテーションを行い、地区住民の賛同を得ることができた。この時の発表では「地域の空き家を活用した子どもから高齢者まで気軽に立ち寄り、楽しく過ごすことができるスペースと、学生のシェアハウス等の複合機能を併せ持つ、多様なふれあいや交流を育む、住民の交流拠点」を提案した。それを契機に「じ・ば・子のおうち設立準備会」を立ち上げることとなった。準備会構成員は、城東まちづくり協議会会長、地域福祉事業部長(民生委員・児童委員)、民生委員・児童委員、愛育委員・栄養委員、老人クラブ会長、青壮年部長、そして住民有志、津山市協働推進室、津山市地域包括支援センター、津山市社会福祉協議会、つやまNPO支援センター、美作大学という地域福祉事業部構成員であった。

第一回「じ・ば・子のおうち設立準備会」は2013年4月10日に行われた。ちょうどそのころ、千光寺の所有する空き家（木造2階建て　延べ80平方メートル）を無償で借りられるということとなり、「じ・ば・子のおうち」構想は一段と具体化していった。「① 空き地・空き家の整備」「② 子どもと高齢者等を支援する活動」という城東まちづくり協議会が取り組むべき二つの方針にかなう事業であった。

第一回の準備会では「誰もが気軽に立ち寄れる場にしていきたい。」「畑や動物の世話をする等、高齢者や子どもたちが自分の役割を持てる場所としたい。」「様々な地域のイベントを開催したい。」「野菜等の販売もできる場としたい。」「修繕や修理などのワークショップを実施しながら、地元住民を中心に、自分たちで作る場としていきたい」等の意見が出され、これらが基本コンセプトとなった。

5月9日第二回の準備会では、千光寺所有の空き家の下見、事業開始に向けて助成金の申請等について話し合い、より具体化していった。

5月17日に現地へ下見に行き、荒れ果てた空き地

と空き家ではあったが、整備をすれば使用可能であることを確認し、この場を「じ・ば・子のおうち」とすることが決定した。5月18日には津山市公募提案型協働事業の公開プレゼンテーションが行われ、自主ゼミ生が発表し、見事、採択され、30万円の助成金を得た。

その後、地元住民に声かけを行い、6月1日、22日、8月17日、9月28日、11月23日、2014年3月29日の計6回、草刈りや花壇整備、室内清掃、納屋整備等を行い、地元住民と関係者等延べ約 200人（うち美作大学生・教員延べ 56人）が参加した。

写真1　掃除中の様子

3.「じ・ば・子のおうち」プレオープン

第4回　城東「じ・ば・子の文化祭」

2013年12月1日、「じ・ば・子のおうち」を会場に第4回の「じ・ば・子の文化祭」を開催。これまでの文化祭とは違い、特別なことをするのではなく、花壇に花を植え、看板を作成し、障子を張るなど「じ・ば・子のおうち」をみんなで作り上げるというコンセプトで行われた。約100人の「じいちゃん・ばあちゃん・子ども達・地元住民・学生」等が集まった。

写真2・3　　第4回　じ・ば・子の文化祭の様子

4.「じ・ば・子のおうち」オープン

2014年4月5日、いよいよ「じ・ば・子のおうち」が本格的にオープンした。オープニング・セレモニーでは餅まきを行い、盛大に祝った。春に卒業した学生から譲り受けた冷蔵庫・電子レンジ・ガスコンロも設置され、「おうち」としての機能も充実してきた。運営は「設立準備会」メンバーがそのまま「運営委員会」メンバーとなり、毎月運営委員会を開いて企画・運営をしている。2014年度はJT(日本たばこ産業)から助成金150万円を受けることができ、腐って落ちていた床や使えなかった台所、トイレを修復し、活動資金もめどがついた。

写真4　じ・ば・子のおうち　オープン時

毎月10日ほど開館し、①通常開館　②催し開館　③放課後子ども教室事業[6]を行っている。①通常開館は平日の13時から17時。日中は高齢者や、幼児、夕方からは学校帰りの子ども達が立ち寄る場として開館

している。②催し開館は、ヨガ教室、消火訓練・心肺蘇生法、高齢者健康講座、消費者被害講座等を行っている。③放課後子ども教室事業は、月に2回、土曜日の10時から15時に実施。おうちの裏の丹後山へのハイキング、こいのぼりや七夕飾りといった季節の行事、草木染や木の実の人形作り、石絵など、高齢者も子どもたちも一緒に楽しめる内容を行っている。高齢者の健康講座が行われる前に、畳の部屋でも座りやすいように牛乳パックで椅子づくりを行うなど、子ども達と高齢者が助け合って、より快適な環境づくりをめざしている。

大きな行事としては、7月5日に七夕まつり、8月8〜9日には夏のお泊り会[7]、9月28日には大運動会を開催した。そして11月16日には、第5回「じ・ば・子の文化祭」を行った。

学生と教員は毎月1回行われる「じ・ば・子のおうち運営委員会」に出席し、運営企画を行い、主には土曜日の放課後子ども教室事業等に参加し、子どもの遊び相手や子どもと高齢者との繋ぎ役等になっている。夏のお泊り会や大運動会においても運営の中心的な役割を果たした。

5．これまでの成果と課題

2011年に発足した「城東まちづくりプロジェクトチーム」において把握された城東地区の課題解決のために、「じ・ば・子のおうち」が誕生した。過疎高齢化が進む城東地区において、人々のつながりや他世代交流の場が必要とされ、「じ・ば・子の文化祭」の成果から常設の「地域の居場所」が求められた。そして、住民と関係者とで、空き家の選定、借り受け、整備、そして運営まで行っている。「拠点」という一つの形ができたことは大きな成果であり、地元新聞や津山市の広報誌等にも取り上げられるなど、地区内外にも大きな反響があった。

しかし、当初の計画では、「当面は3日に1日のペースでおじいちゃんとおばあちゃんが常駐。小学生らと一緒に昔遊びを楽しんだり、勉強を手伝ったりすることで高齢者の生きがいづくりに役立てるとともに地域の活性化につなげる」（2014年4月4日付の山陽新聞記事より）ことを想定していたが、土曜日の放課後子ども教室事業には常連の子どもが来るようになったのに対し、高齢者がなかなか集まらないという現状となっている。

一つは坂の上にあるという立地条件が高齢者を敬遠させているようだ。

そこで高齢者向けのヨガ教室や高齢者講座の周知を民生委員・児童委員や愛育委員・栄養委員に依頼したり、放課後子ども教室事業の内容を高齢者も興味を持ちそうな内容にしてみたりと、高齢者の参加を促す工夫をしている。

将来的には、学生等が高齢者を個別に呼びに行き、安全に一緒に来ることができるような工夫も必要ではないかと考えている。

また運営委員も城東地区民よりも外部の関係機関や大学関係者の方が多い現状がある。住民主体の取り組みとなるよう、城東まちづくり協議会として、城東の住民として、積極的に運営に関わり、城東地区の本来の活性化につなげていく必要がある。

さらに地域福祉の視点から、地域の中で支援を必要とする人の福祉課題を住民みんなが共有し、早期発見・早期対応のためのニーズキャッチや地域支援の仕組みづくり＝「地域包括ケアシステムの構築」に向けて、その拠点となるように、小地域ケア会議[8]としての位置づけを付与していく予定である。地域の課題に対し、地域住民と行政、関係機関が一緒に取り組み、課題を解決するという、まさに「ローカルガバナンス」[9]の取り組みにしていくことが求められる。

6．終わりに

これまで学生は、「じ・ば・子のおうち」の整備、会議の議事録作成、広報紙の作成、助成金獲得のプレゼンテーション、地域住民へのプレゼンテーション、そして現在では、「じ・ば・子のおうち」の運営や開館日当日のスタッフとしての役割などを担ってきた。これらの取り組みを通して、自主ゼミとして学生の地域福祉実践力を高め、「地域に根ざした社会福祉士」

の育成を図っている。今後も継続的に関わるために、現在の学生の育成と共に次世代の学生を新たに募っていく必要がある。自主ゼミとしてのもう一つの活動「ものみりょくプロジェクト」[10]と共に、隔年の学生に呼びかけ、継続した活動をしていく予定である。

2013年度は4年生5名、2年生7名が自主ゼミとして活動。2014年度は3年生7名が引き続き活動し、この学生たちが4年生になった時に、新たに2年生を募っていくことにしている。

また、現在の「じ・ば・子のおうち」は学生のシェアハウスとしては適さない立地条件、家屋構造となっている。さらにもう一軒、空き家を借りて、学生が実際に城東地区に住み、城東地区住民として日常的に地域活動に関われる方法を提案している。このような場所が大学にとっても「知（地）の拠点」となるよう、城東「じ・ば・子のおうちプロジェクト」をさらに充実した取り組みにしていきたいと考えている。

参考文献

[1] 城東まちづくり協議会編『城東地区のまちづくり　～人の話　まちの輪　城東の和』2012.3

[注]

1）城東地区は全世帯が667世帯であるが、城東まちづくり協議会による2011年11月現在の空き家調査では、実に157軒もの空き家があることが明らかになった。

2）城東地区の13町内会主体で組織されている団体で、「城東地区の歴史と伝統を活かした新しい文化を創造し、地域の発展と津山市観光振興及びまちづくり施策と協働し、住みよい環境づくりをめざし、後世に地区の素晴らしさを伝えること」を目的としている。

3）津山市の協働推進室が行っている「市民主体のまちづくりを推進するため、平成21年度から、市民（市民活動団体等）の皆さんと、行政（市役所）とが協力して地域の様々な課題解決を行う事業」。

4）津山市「地域チャレンジ！公募提案型協働事業」に応募した際に、事業の目的として掲げた文章。プロジェクトチームメンバーで意見を出し合って考えた。この申請書に基づき採択された。

5）正規の授業や単位認定は行わず、教員が独自で声をかけ、学生が自主的に行うゼミナールのこと。社会福祉学科では複数の教員が自主ゼミを開講して、学生の成長を支援している。

6）「津山市子育て支援行動計画」に位置付けられた事業で、地域住民の参画による、放課後や週末などの子どもたちの安全で安心な活動拠点づくり。津山市こども課が市内の複数の団体に委託をしている。つやまNPO支援センターが事業を受託し、「じ・ば・子のおうち」で開催している。

7）学生が企画をした、夏休みの小学生が「じ・ば・子のおうち」に泊まる会。夕方から幼児・保護者・高齢者等も一緒にバーベキューや花火をして、小学生とスタッフが宿泊し、翌日、また地域住民と共にそうめん流し等を行った。

8）住民福祉関係者（民生委員・児童委員、愛育委員・栄養委員、町内会役員等）と、行政の各福祉担当者や、圏域内の各種福祉サービス従事者・専門職とが同席して行う福祉のまちづくりに向けた会議（協議の場）。概ね小学校区・旧町エリア等で行われる住民と専門職とのネットワーク。

9）行政と市民が、お互いをパートナーとして認め合い、公共的な課題解決に協力していこうという自治のあり方。

10）小坂田・堀川研究室が行っているもう一つのプロジェクト。津山市加茂町物見地区で行っている、高齢化と過疎化が進む中山間地域における地域づくりの取り組み。